

骨関節炎を早期発見するためのポイント

- 歩くのが遅くなった
- 足をひきずって歩く
- 片足を上げて歩く
- うさぎ跳びのように歩く
- 膝をかばうように歩く
- 階段を両後足で上がる、両前足で下る
- 歩くとお尻が左右に揺れる、頭が上下に動く
- 休息姿勢から起き上がる際の動作がぎこちない
- ジャンプする際の動作がぎこちない
- すぐに横になりたがる
- 元気がない。不安そうに見える
- 足をさわると痛がる

「最近、小次郎(柴犬)が毎日の散歩に行きづらなくなりました。散歩に出た日でも、すぐに帰ろうとす

犬種にかかわらず
高齢犬に多い病気

骨関節炎

シニア柴犬が注意すべき 3つの病気

骨関節炎

腎臓病

認知機能障害

「最近、小次郎(柴犬)が毎日の散歩に行きづらなくなりました。散歩に出た日でも、すぐに帰ろうとす

「……」。知人のこんな話を耳にした。聞けば、小次郎の年齢は10歳。立派なシニア犬である。散歩をおくうが、ようになるのは老化のサインの一つとされ、もしかしたら骨や関節に不都合があり、歩きづらいのかもしれない。高齢犬に多い骨の病気の一つに、骨関節炎がある。骨と骨の間の軟骨に障害が起こり、痛みが生じるのだ。正常な関節は軟骨の表面がツルツルして動きも滑らかだが、加

齢や何かの原因で軟骨の表面がすり減ってくると関節の動きはギクシクシ、炎症を起こす。最終的には硬い骨同士がぶつかりあい、非常に大きな痛みを伴うことになる。骨関節炎が進んで歩きづらくなると、排泄のために愛犬を抱きかかえてトイレの場所や外に連れていったり、痛みをとるための鎮痛剤を生薬や塗り薬に頼らなければならなくなったりと、飼い主の日常生活にも影響が及んでしまう。

腎臓病

食事管理が効果を
発揮する腎臓病予防

シニア犬に発症しやすい病気のひとつが腎臓病(慢性、急性)。腎臓は体内の毒素や老廃物を除去したり、尿をつくらしたりする役目があり、腎臓の機能が働かなくなると老廃物を排泄できず、命を落とす危険もある。人間同様、腎臓は無言の臓器で、75パーセントが壊れるまで血液検査の数値に変化が出ないので、いま目の前にいる柴犬が健康そうに見えても、じつは腎臓は悲鳴をあげている。手遅れにならないように、高齢になった腎臓に負担のかからない食事管理をしてあげること。また、若い時期からそのような食事管理を心がけておきたい。

そこで改めて知っておきたいのは、肉の与えすぎは腎臓にもよくないという点。肉だけの食事はタンパク質やリンの摂りすぎになる一方、カルシウムはほとんど摂取できない。過剰なリンの摂取は窒素性老廃物を増やし、尿毒症の原因になって慢性腎臓病の進行に関与することが明らかにされている。

犬にとって絶対にかかせない6大栄養素は、脂質・必須脂肪酸・タンパク質、ビタミン、ミネラル、炭水化物、そして水分だ。脂質はエネルギー源となり、とくに必須脂肪酸は犬が体内でつくりに出ずることができないので、食物からしっかりと含む日本犬の場合は、オメガ3と呼ばれる良質な脂肪酸を積極的に摂取したほうがよいとされる。タンパク質は血液や筋肉となり、ウイラスを撃退する抗体をつくる栄養素としても知られている。ビタミンは体の生理機能を整え、不

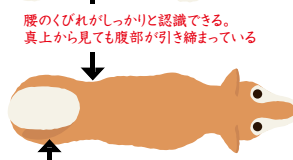
BCS5

世界小動物獣医学会(WSAVA)が推奨するボディコンディションスコア(BCS)では犬の体型を9段階で評価。理想体型のBCS5を維持できているかどうかをチェックしよう。ポイントは肋骨と腰のくびれだ。

理想 体型



肋骨部分をなでると
余分な脂肪を感じることなく、
骨にさわることができる



腰のくびれがしっかりと認識できる。
真上から見ても腹部が引き締まっている

腰部に脂肪が付きすぎているか手でさわって確認する

太りすぎ

BCS9 腰部や脊椎、尾の付け根部分にも大量の脂肪が沈着し、肋骨が容易にさわれない。腰のくびれ、腹部の凹みが見られず、腹部の膨張が明らか

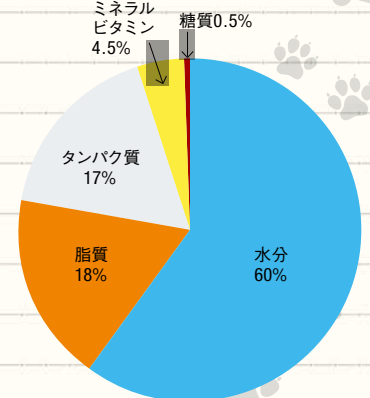
BCS7 腰部や脊椎、尾の付け根部分にはっきりとした脂肪沈着が見られる。手で触れると、なんとか肋骨が確認できる。腰のくびれはほとんどない

やせすぎ

BCS3 お腹に触れると、肋骨が容易に確認できるか、見た目で肋骨が見える。腰の上の方をさわると、骨盤が突き出ている腰がはっきりくびれている

BCS1 肋骨、腰椎、骨盤のほぼほとんどすべての骨のかたちが外から確認できる。体脂肪がまったくない、腰のくびれが著しい

犬の6大栄養素の理想バランス



6大必要栄養素を知っておく
もっとも重要なのは「水分」

犬にとって絶対にかかせない6大栄養素は、脂質・必須脂肪酸・タンパク質、ビタミン、ミネラル、炭水化物、そして水分だ。脂質はエネルギー源となり、とくに必須脂肪酸は犬が体内でつくりに出ずることができないので、食物からしっかりと含む日本犬の場合は、オメガ3と呼ばれる良質な脂肪酸を積極的に摂取したほうがよいとされる。タンパク質は血液や筋肉となり、ウイラスを撃退する抗体をつくる栄養素としても知られている。ビタミンは体の生理機能を整え、不

足りると貧血や被毛の劣化、骨の病気など、欠乏症になる恐れがある。逆に摂りすぎても、過剰症として健康に異常をきたすことになってしまうので、正しく摂取することが大切だ。カルシウムやリン、マグネシウムといったミネラルは筋肉や神経などの機能に影響する。これもビタミン同様、欠乏症や過剰症にならないよう注意。そして、6大栄養素でもっとも重要なのが水分だ。体に含まれる栄養素の中でも、水分は約60%というもっとも多くの割合を占めている。1日に与える量の目安は、愛犬の1日あたりに必要なエネルギー量の値をミリワットルに置き換えた量に等しいとされている。